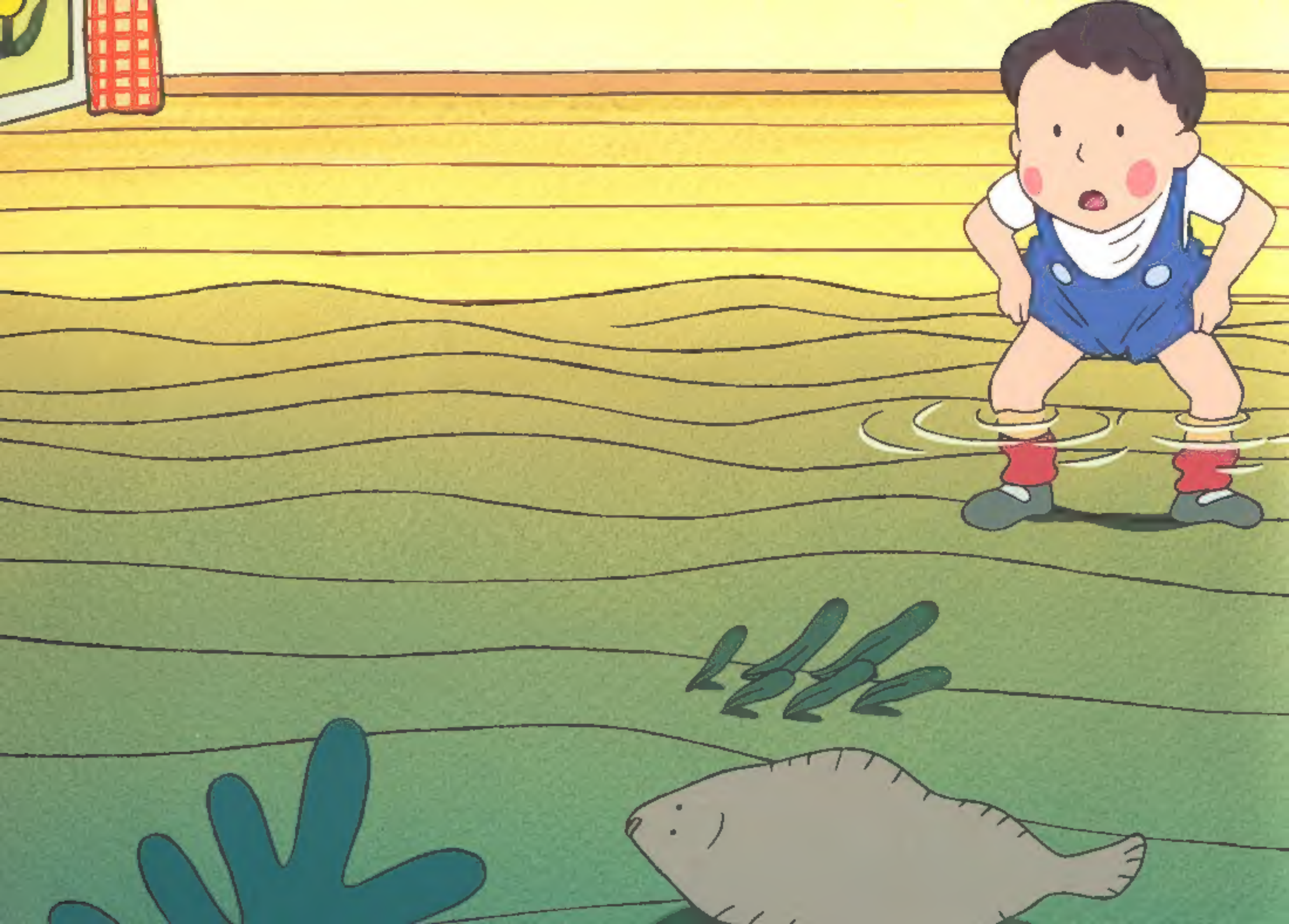


# くじらとトリ







「チコちゃんおはよう」  
「しげるちゃんおはよう」



「ハイ ほくもライオン」



「どっちもつよいからいっしょにしよう。  
ぞうとライオン丸」



「ほしくみさんってすごいねー」  
「フネだ。りっぱなフネだなあ」



「ぞうならライオンをふんづけて  
はなでひっぱたいちゃうぞ」



「ではつぎにのせるものをとりにいこう」  
「くじらをつるつりざおがいるね」



「これからフネのなまえをきめます」「ぞう！」  
「ライオンがいい」「ぞうがいいよ」「ライオンだい！」

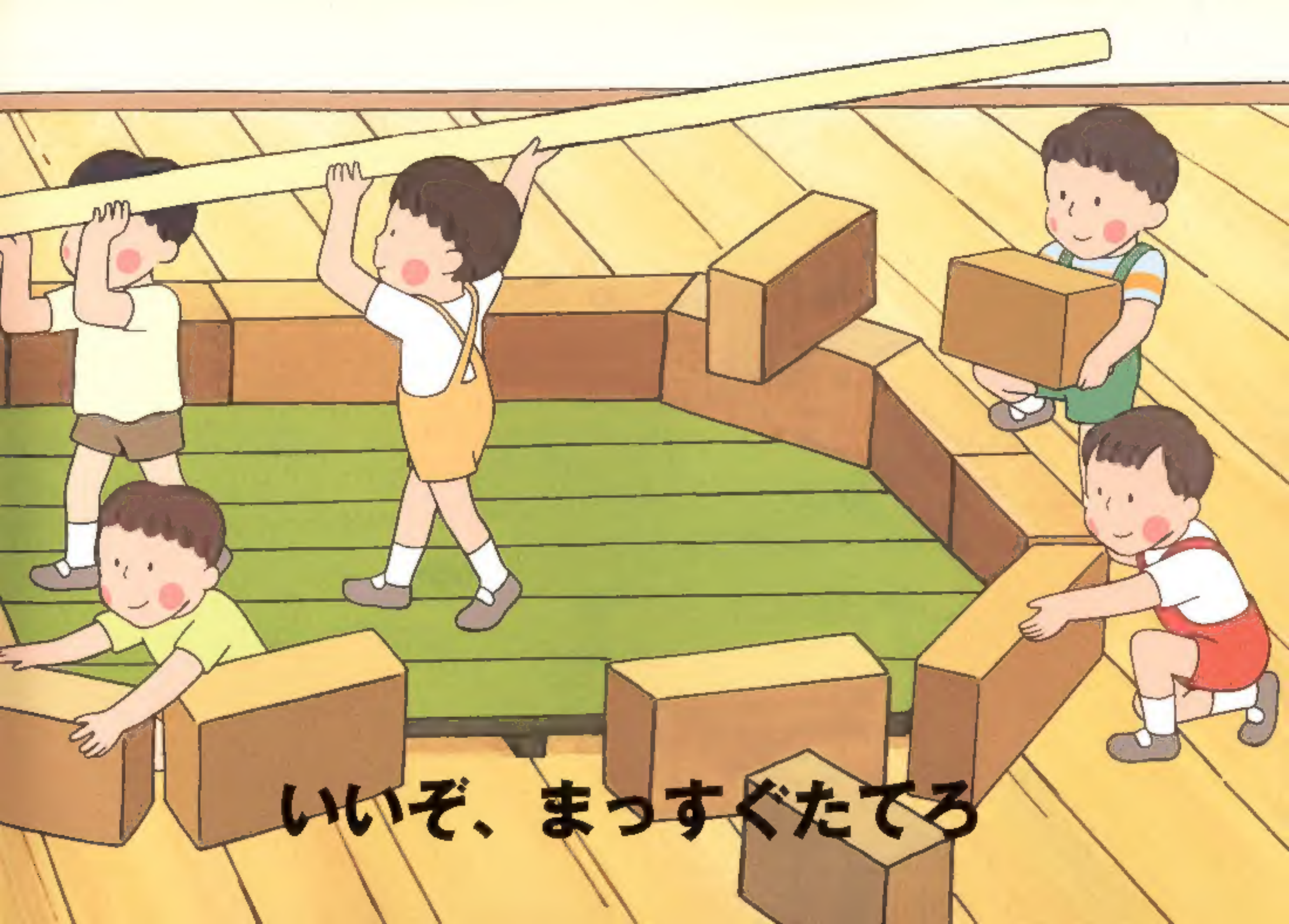


「ヘッ そんなのうそだよ  
ライオンはかみつきますからね」



「ざわっちゃだめ。こわれちゃったじゃないか。  
フネにあながあいたらしずんじゃうんだぞ」

※写真下の文は、宮崎監督が描いた絵コンテに準じています。



いいぞ、まっすぐたてる

オーイ、



「たいへんだ、水がもって来た  
しげるちゃんがこわした」



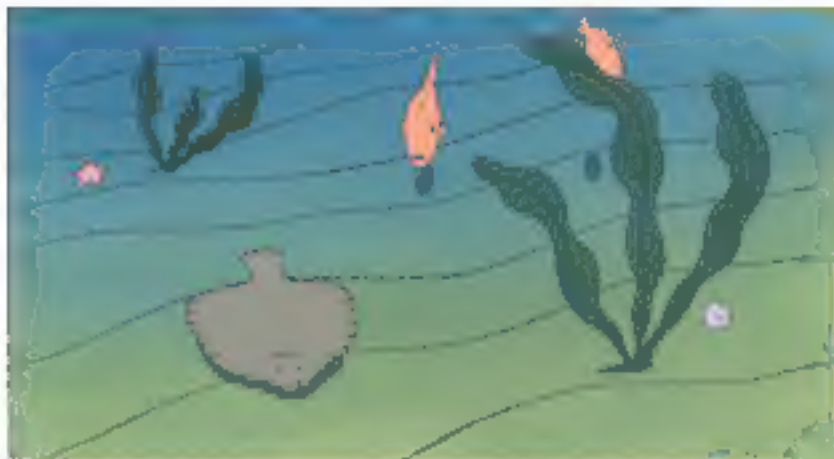
「バンザーイ、なおったぞー」  
「よし、くじらとりに出発っ!!」



「ちんぼつしちゃう？」  
「しずんだらしげるちゃんのせいだからな」



「バチ バチ バチ バチ」



「さかなだ!! ひらめだ、タイもいる」



「だめだよ、きみはすぐあぼれるからねー」



ぼくもつれていってよー





# くじらだ…

おっきいねエ～

くじらくーん、ぼくとあそぼうよ～





挿入歌

# 「ぞうとらいおんまる」

作詞/中川幸枝子

作曲・編曲/野見祐二

歌/ほしくみのおとこのこたち

おひさま ひゃっこも そらのうえ  
しおかぜふいて なみがとぶ  
ぼくらは くじらを つかまえに  
ぼくらは くじらを つかまえに  
おお ぞうとらいおんまる  
おお ぼくらの ぞうとらいおんまる

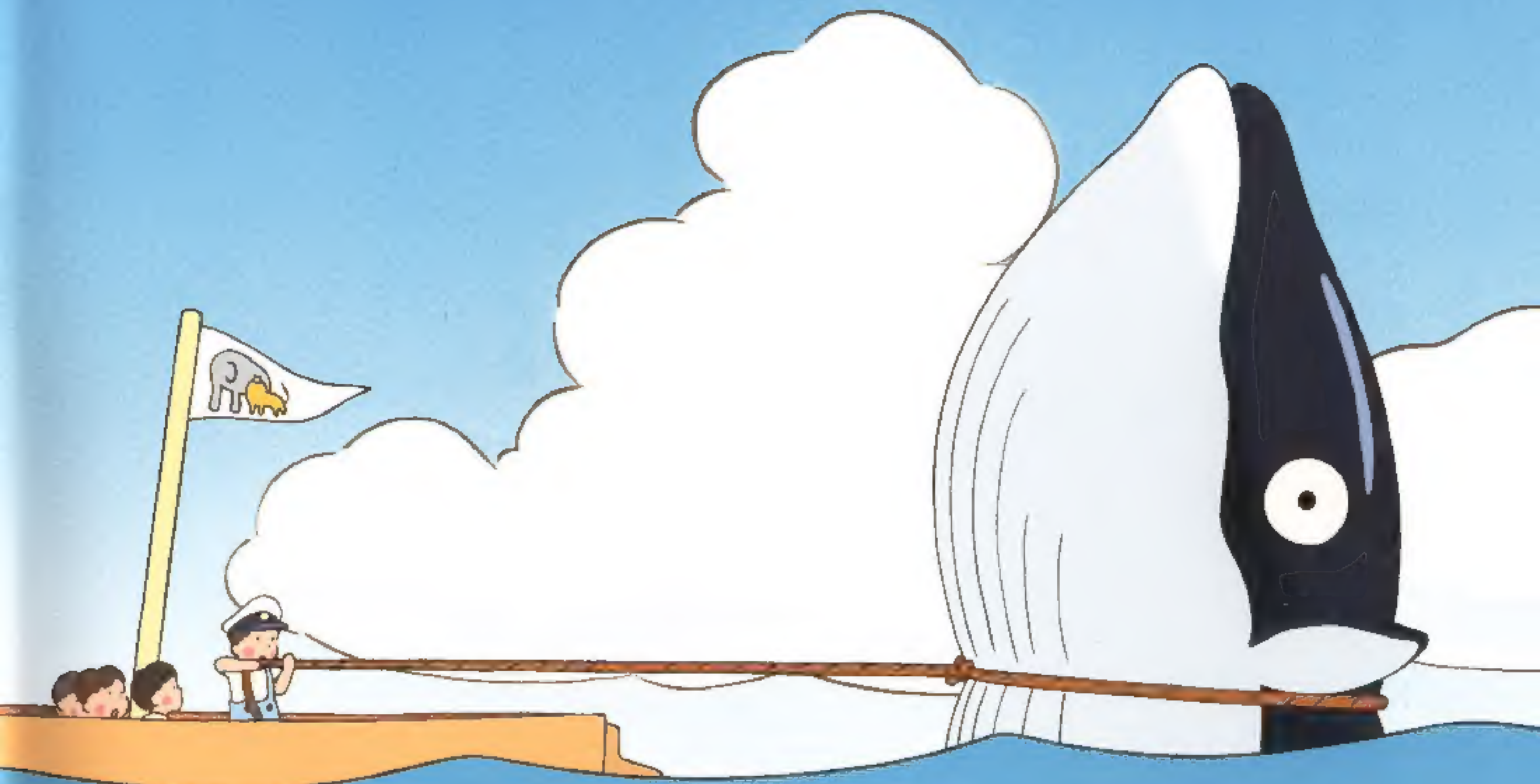


「くじらがかかったぞ」



「まけるな」



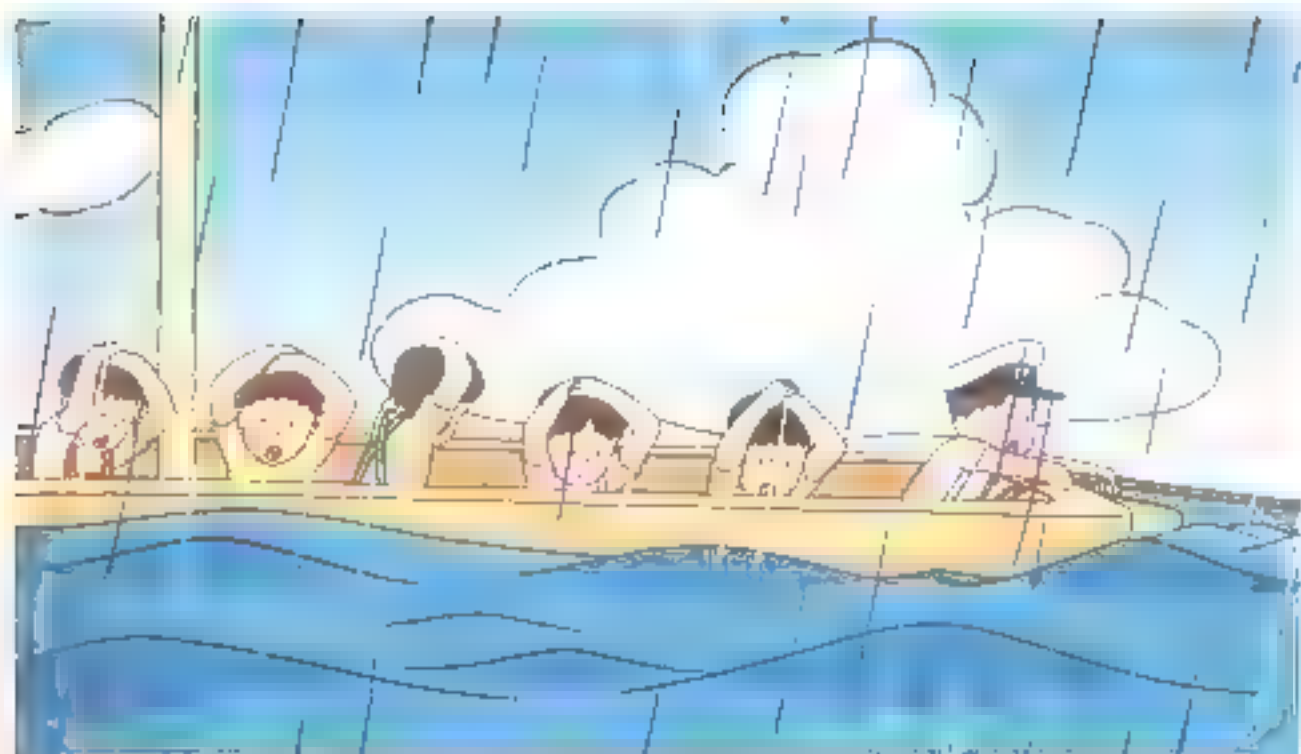


つかまえたぞ

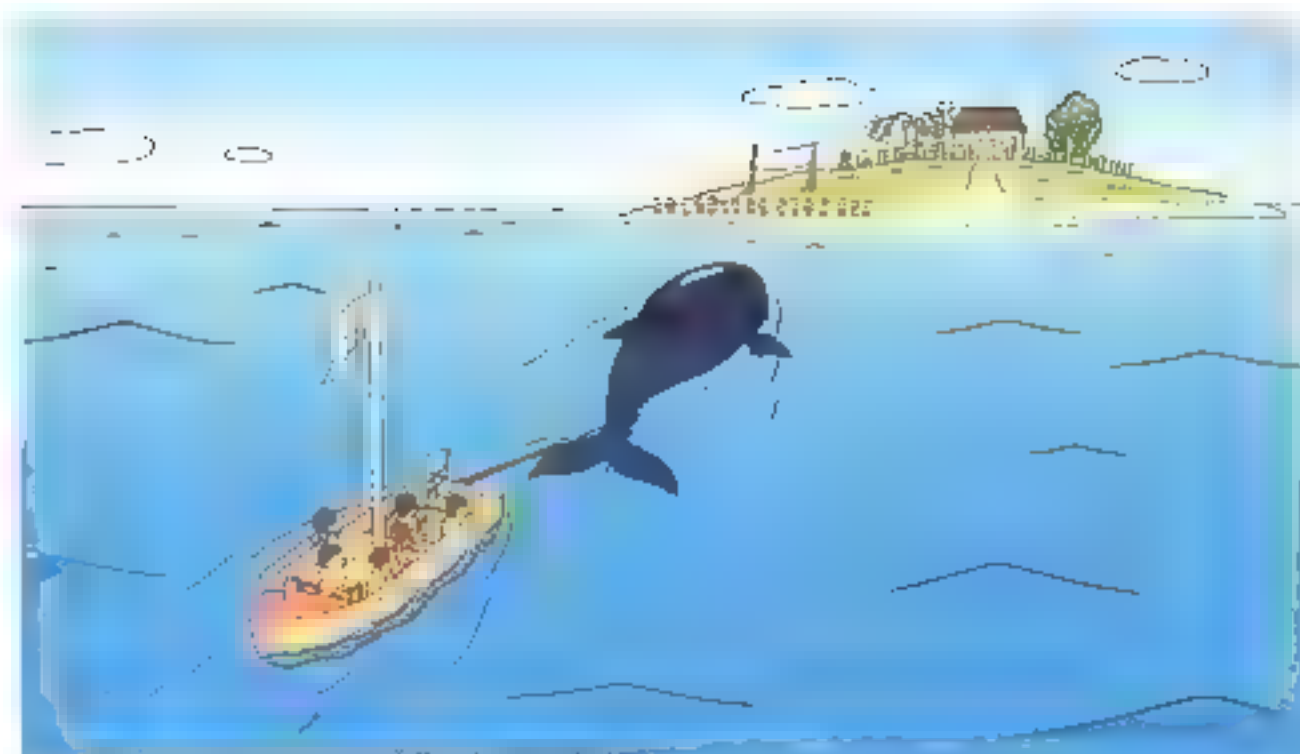


嵐が来るぞ。みんなしっかりつかまれ

ワー、目がまわる～ヨ～



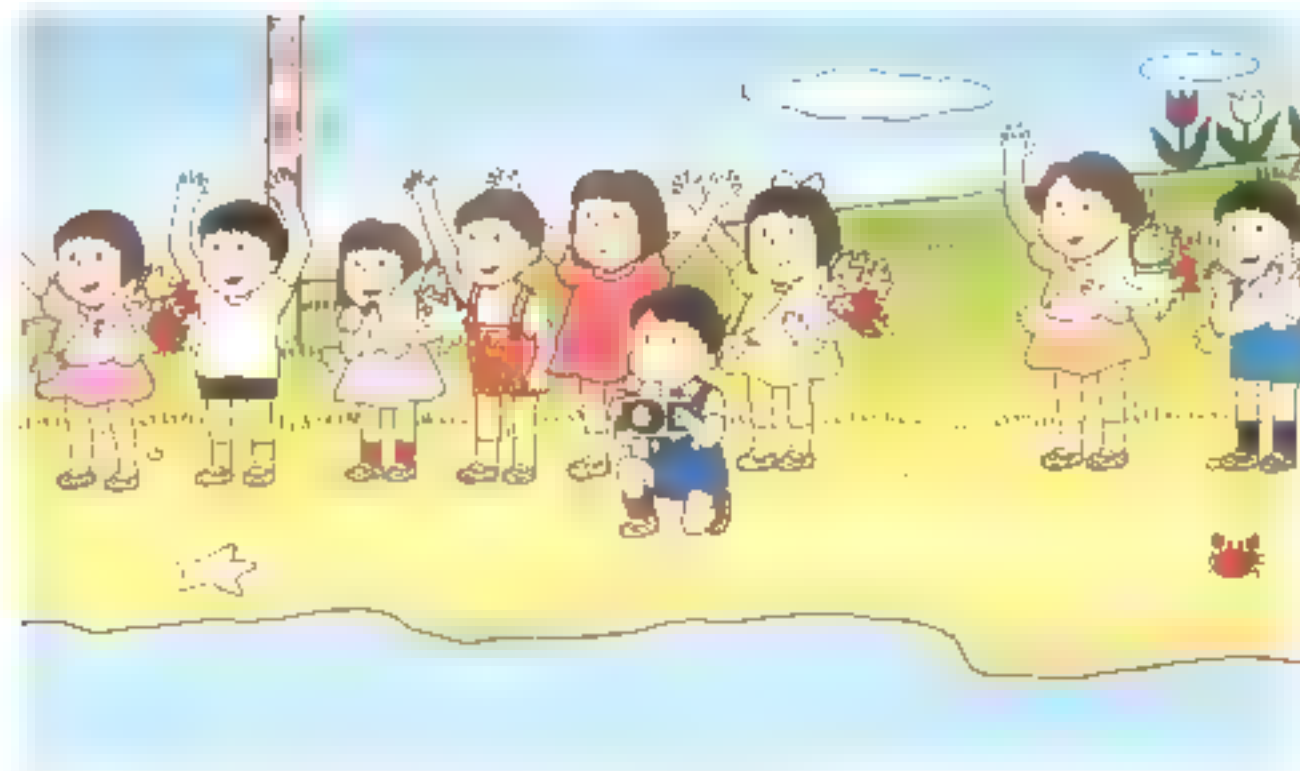
「ワーツ、しょっぱいよー。そうだ、毛布をかぶろう」




「あれっ、フネがぎゃくにすすんでるよ」  
「くじらがひっばってるんね」



「これな目平気だね。よし、このままひっばってもどろう」  
「まっくろな雲だ」



「あっ…、かえって来た。くじらをつれて来たよ」  
「おかえりなさいーい、くじらさんこんにちわ」



ガフフフフ  
アハハハ

「もっと笑って!」 「グハハハ」

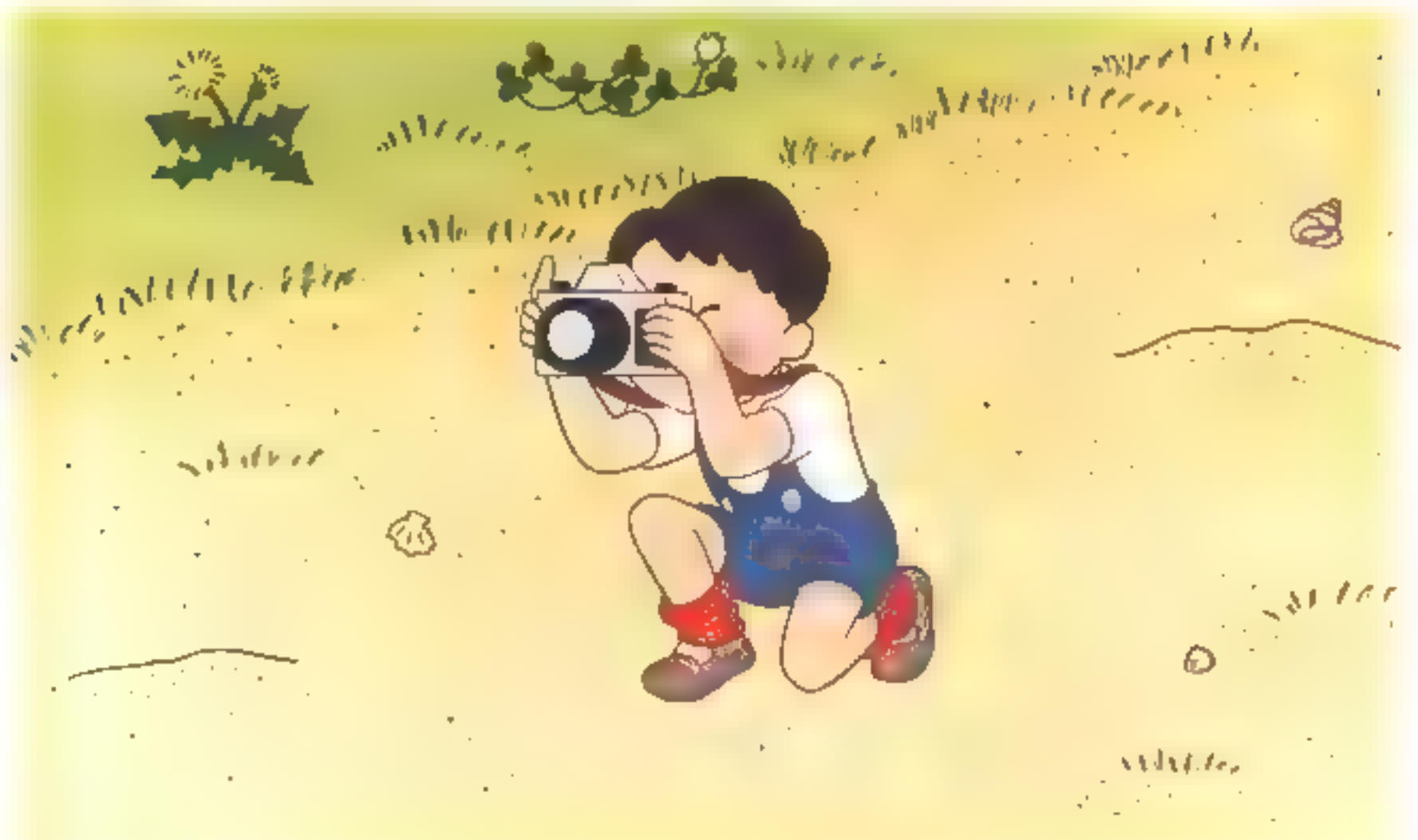




「キヤー、とっしんして来る」



「グフグフ」



「写真を撮りますから、ぞうとライオン丸のひとと、くじら君は並んで下さい」「わらって」  
「つぎは番むかえの人も入って下さい」「わらって」

中川李枝子(なかがわりえこ)

1935年、札幌生まれ。'55年に東京都立高等保母学院を卒業後、15年間保母として働く。'59年に同人誌「いたどりシリーズ3」に「いやいやえん」を発表。'62年に福音館書店より「いやいやえん」が発行され、翌年、厚生大臣賞、サンケイ児童出版文化賞など多数の児童文学賞を受賞。主な著書に絵本「ぐりとぐら」シリーズをはじめ、童話「ももいろのきりん」「かえるのエルタ」「らいおんみどりの日ようび」、エッセイ「絵本と私」など多数。

山脇百合子(やまわきゆりこ)

1941年、東京生まれ。旧姓・大村百合子。上智大学外国語学部フランス語科を卒業。高校3年生の時に、姉・李枝子さんが同人誌に連載した「いやいやえん」の挿絵を描いてから、李枝子さんの書く物語に絵を描き続けることに。'63年には李枝子さんとともに月刊絵本「こどものとも」に「ぐりとぐら」を発表。以降も李枝子さんと一緒に「そらいろのたね」「たからさがし」など、次々と「こどものとも」に発表。その他、著書に創作絵本「そらをとんだけいこのあやとり」がある。現在はレオポルド・ショヴォー■「きつねのルナール」を翻訳中。



この映画■原作  
「くじらとり」が入っている「いやいやえん」  
中川李枝子 さく 大村百合子 え  
福音館書店刊／定価(本体1200円+税)

# 原作「くじらとり」のひみつ

原作者：中川李枝子&山脇百合子

この映画は、厚生大臣賞、サンケイ児童出版文化賞など、多数の児童文学賞に輝いた児童書「いやいやえん」(福音館書店刊)の中にある同名の物語をもとに作られている。物語を書いた中川李枝子さんは、もともとは日本一の保母になることを夢に、保育園で働いていた保母さん。物語を書く気なとまるでなかったという。だが中川さんが大好きだった岩波少年文庫の編集をしていたいぬいとみこさん(編集のみならず自らも児童書を書き、野間児童文芸推奨作品賞を受賞した「うみねこの空」などで有名)にファンレターを出したことから事態は一種、憧れ書いぬいさんの誘いで児童文学グループ「いたどり」に参加し、自ら物語を書くことに……。『くじらとり』はそんな中川さんがはじめて書いた物語。この物語にまつわるエピソードを、中川さんと、中川さんが書く物語のイラストを数多く手がけている山脇(旧姓大村)百合子さん(中川さん姪妹)に伺った。

## しげるちゃん■本当にいた!?

——「くじらとり」は中川さんがはじめてお書きになったお話ということですが、この物語が生まれるに至った経緯から伺えますか?

中川 私が入っていた「いたどりグループ」という同人誌に書く番がまわってきて書いたのが「くじらとり」なんです。実はあのお話、当時私が勤めていた保育園の子供たちが作ったものです。

ちょうど私が「いたどり」に載せる物語を考えていた頃、子供たちのご機嫌の悪い日があって、皆なんにもやる気がなくて陰■な顔をしていたの。それでこれは保母としてどうにかしなくちゃいけないと思い、「皆でお話つくろう」って提案したんです。そうし

たら「うん、やろう」って子供たちがノッてきた。そこで子供たちがいつもやっている遊びの一つ「くじらとり」の頭の部分を私がお話にして話したら、あれよあれよという■に子供たちがその続きを作っちゃった。私が15年保母をやっている間に出来たお話はあれ一つだけ。その後も子供たちは時々「お話づくりしよう」って張り切って何度かやりましたが、これほどの傑作は生まれなかった。

——「いやいやえん」の主人公で、「くじらとり」にも出てくるしげるくんという子がとても印象的ですが。  
中川 あの子は実際にいたんですよ。本当の名前はひろしちゃん。ひろしちゃんのお陰で「くじらとり」は出来たといってもいいくらい。当時、1958年頃だったかしら、「お母さんが働くことになったので、お





願い出来ないか」と民生委員の紹介でしげるちゃんが入ってきたの。その時しげるちゃんは3つぐらい。小学生のお兄さんとお姉さんがいた。しげるちゃんは保育園の他の子より年が下だったんだけど、■分は周りの子と同じで対等だと思っていたみたい。だから胸張っていばってた。大きい子たちは都合差でしげるちゃんを仲間に入れたり、邪魔にしてみたり(■)。要するにお味噌扱いされていたんです。

—それは「くじらとり」の中と同じですね。

中川 そうなの。本当にあんな感じ。「いやいやえん」に書きましたけど、園の決まりなんかも全然守れなくてね(笑)。でもほんとに子どもらしい、とても■白くて可愛い子だった。

## 「いやいやえん」は私の保育理論書

—物語が作られた経緯はわかりましたが、山脇さんがお話に合わせて絵を描かれることになったきっかけは？

山脇 姉に頼まれたからなんですけど、最初に「いやいやえん」全部の原稿を■んだ時、「こんなに面白いおはなし読んだことがない」と思いました。これに絵を描くのかって思ったらとっても嬉しかったです。何がそんなに良かったのかっていうと、話がすごくテキパキ進んで、お母さんが用もないのにやたらに出てこない(笑)。

中川 子供だけの世界だから。

山脇 それが新鮮っていうか、読んでいて快感だった。それでいざ絵を描こうと思ったら、私の周りに

はしげるちゃんと同じような年頃の子がいなくて困ってしまいました。そうしたら姉が、ある日「これがしげるちゃんよ」って保育園からしげ■ちゃんを連れて帰ってきたの。

中川 そう。しげるちゃんのお母さんをお願いしてお借りしたのよ(笑)。

山脇 それで家に一晩泊■らせて(■)。

中川 だから■も実物を見て描いたのよね。

山脇 私はあの子が全然泣かなかったことが今だに不思議。普通だったら心細いじゃない。

中川 私がいたから平気だったのよ。

山脇 そうはいつでも…。当時、私は高校3年生だったと思うんだけど、たいしたもんだなあって思った。

くじらの■も何かご覧になって描かれたんですか？

山脇 あれも大変だった。「いたどり」に載せた絵は、とにかく資料がなくて、百科事典とか動物図鑑を見てなんとなくこんなかしらって感じでしか描けなくて、「いやいやえん」って本になる時は、上智大学の聖三木図書館に行って「ナショナル・ジオグラフィック・マガジン」とかいろんな資料を見て、いかにも海にいるような感じを出そうと思って描きました。

中川 まあ、そうだったの。全然知らなかったわ。もっとちゃっちゃと描いてしまったとばかり思ってた(■)。

山脇 今ならくじらの写真なんかいくらでも見れるんでしょうけどね、「いやいやえん」を出した1962年頃じゃ、写真や実物を見るなんて出来ませんでしたから。

—しげるちゃん以外の子供の絵を描く時はどうされたんですか？

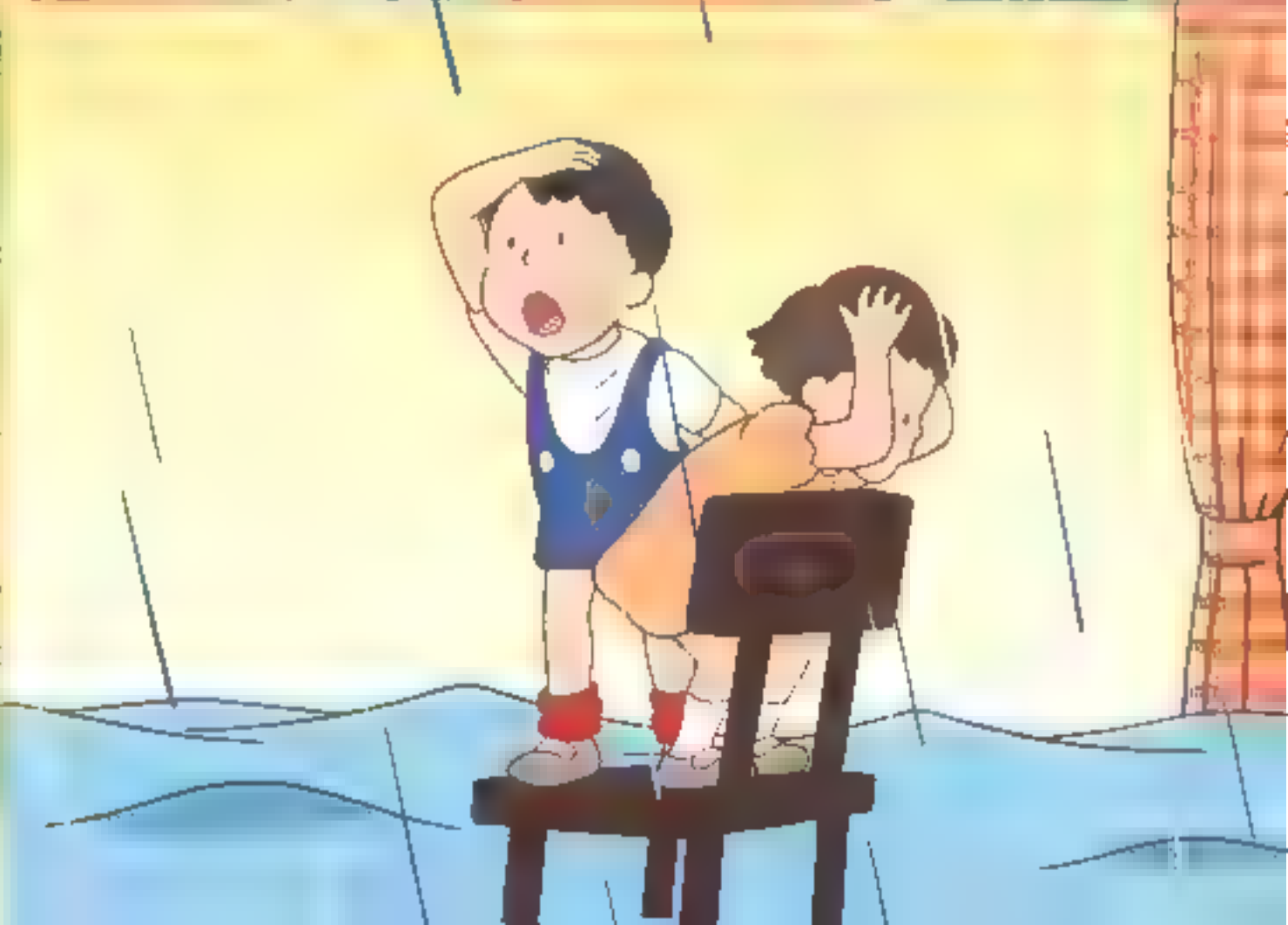
中川 あなた、良く保育園に来てたわよね。その時に観察してたんじゃない？

山脇 特に絵を描くためについていうわけではなかったけど、そういえばときどき保育園に行っていたわね。なんだかあそこにはあまり見られない大きな積木があったりして面白かったから(笑)。

中川 あの大きな箱積木は■当に役に立ってたのよ。保育園の財産といたらあれくらいだったんじゃないかしら(笑)。なにせ無認可で、園長先生と主任の私の■人しかいない小さい保育園だったから。あの頃はほんと、毎日楽しかったわ。園長先生に「一人の欠席もない、子供たちが毎日喜んで来る保育をしてくれ」って園に入る時に言われたの。だから、毎朝空を見て「今日は何して遊ぼうかな」って考えてね(笑)。

山脇 そういう生活をしていたのなら毎日が新鮮だったでしょう。

中川 それはもう。私は保母学校でいろいろカリキュラムの立て方など教わりましたけど、私は自分で考えて自分でやりたい、最高と思う保育をしてましたからね。でも友達から「あなたまだ潜りで主任なんかやってるの？」なんてからかわれたりもしてた。それが悔しくてね。今にして思えば、私だって一生■命やってるのよっていうところを見せたくて、「くじらとり」や、その他、チューリップ保育園の物語を書いたような気がするわね。そういう意味では「いやいやえん」は私の保育理論書のつもりです。日本一の保母さんになる自信があったのに15年しか動めなかった私が言うのも恥ずかしいんですけど(笑)。



# くじらとり 制作ノート

## 果たせなかった宮崎監督の野望

この作品の原作である同名のお話が、原作者の中川さんと中川さんが勤めていた保育園の園児たちによって作られたものであったことを知っていたのだろうか、宮崎監督はある日、「この作品の子供たちの声は、実際の幼稚園で番組みたいにくじらとりごっこを子供たちにさせて、それを使おう」と言いだした。アニメーションの音源収録という、たいていは絵柄が完成した後にその絵に合わせて役者さんに台詞を言ってもらう「アフレコ」※、先に役者さんの声を録って、その喋りに合わせて絵を描いていく「プレスコ」という方法がとられている。だが今回宮崎監督が言いだした方法はそのどちらでもない。ごっこ遊びを収録して、その声を使おうというのだ。スタッフは驚きながらも、スタジオ近辺の幼稚園に行き、実際にそんなことが可能なかどうか下調べを行った。幼稚園児といえば4才、5才。映画の中で流れる台詞の声を運びながら撮ることは機能的な制約や、保護者の同意など越えるべきハードルが多くやはり難しいと判断。最終的には、プロの子役80人の中からオーディションで出演者を決め、プレスコによって収録することに決定した。

## 主人公・しげるくんへのこだわり

この作品の主人公は、くじらとりには行けなかったしげるくん。彼は1つ年が上のほしくみさんの仲間には入れてもらえない。だけど彼はめげることを知らない。くじらとりに連れていってもらえなくても、最後はカメラを用意して自らカメラマン役をつと



←主人公のしげるくん役に抜擢された石原圭人くん。小学2年生  
声の真さと自然体で台詞を言う感で選ばれた

めるなど、常に自然体でその状況を楽しんでいる。そんなしげるくんらしさをいかに生かすかが、この作品を作る一つの大きなポイントだった。

## 野中さん、くじら役に大抜擢

2000年、日本テレビのスペシャル番組で放映されたジブリ作品「ギブリーズ」を覚えているだろうか。そこに登場した野中さん

(ジブリの社員として実在する)がこの作品のくじら役に抜擢された。野中さんといえば、その特異なキャラで月刊「アニメジェム」(徳間書店刊)に「のなかくん」と題した4コママンガになったことでも知られている。今回、子供たちに置かれる(?)くじら役にぴったりだとして選ばれたのだ。収録の時には、あまりに緊張してしまい、少しお酒を飲んで挑んだとか。そうして大役を見事にこなした。



### 「くじらとり」で行った古くて新しい挑戦

現在日本のアニメーションは、1枚の絵を3コマずつフィルムに撮影する、「3コマ打ち」と呼ばれる手法が多く使われている。映画は1秒24コマなので単純に計算してしまえば、これは、1秒の動きを3枚の絵で作っていることになる。ジブリ作品もそれを基準にキャラクターを動かしてきた。だが、この「くじらとり」を作るにあたって、絵コンテを描いた宮崎監督は「この作品は、2コマ打ちを基本にしよう」と提案した。そうすると、1秒の動きを12枚の絵で表現することになる。なぜ宮崎監督がそのような提案をしたのか。そこには一つ一つの動きを愚直なまでに丁寧に見せるという狙いがあったようだ。映画冒頭のしげるくんの動きからしてそれがよく表れている。保育園に向かうしげるくんの歩き、保育園に入った後のくつの履き替え、かばんの置き方など、どこをとっても丁寧に描かれているのがわかる。それらの動きは、観る側を十分に楽しませてくれる。

### エンディング曲

#### 「おかえりのうた」の秘密

エンディングで流れる野見祐二さん作曲の「おかえりのうた」。この歌を作るきっかけになったのは、絵コンテを描いた宮崎監督の記憶だった。監督はある歌を使いたいと、「きょうも たのしく すみました〜」とスタッフに歌って聞かせ、「こういう曲だから、探して」と一言。実はこの歌、監督の息子さん



→ 1秒間で表現したい動きを2コマずつ  
12の動きで表現したしげるくんの歩き。

が子供の頃、保育園に迎えにいった時によく歌われていたものらしく、監督にとって思い出深いものだったのだ。スタッフはインターネットなどでこの歌を探し当て、作曲者の了解のもとに、宮崎監督の記憶の中にある歌詞で、新たにエンディングを作曲した。

### 寄せ書き風のクレジット

「おかえりのうた」が流れる時、映画の画面に映るクレジット。なんだか少し普通の映画と違っていると思われた方も多はず。それもそのはず。この作品では、誰がどんな役わりをしたのかというような堅苦しいものをやめ、出演者、スタッフほぼ全員が自筆でサインしたものをそのままクレジットとして流しているのだ。もちろん発端は、宮崎監督の「寄せ書きみたいな感じにしたら」という一言。プロデューサーをつとめた居村健治さんが、この作品に係わった出演者、スタッフ一人一人のサインを集めた。

「一応、枠を決めて、だいたい大きさがそろそろようにこの大きさに書いて下さいってお願いしたんですけど、人によってはこちらが決めた枠より大きく書いたり、小さかったり、細かったり、太かったり、集めてみたらみんなバラバラ。それはそれで人柄が出て面白いのかなとも思いましたが、画面にそれが流れることを考えるとね…」

結局、居村さんが全員の名前の大きさがそろそろようにコピーで調整したのだとか。ごくろうさまでした。



声の出演

しげる 石原釜人  
 チコちゃん 小野寺真央  
 キャプテン 伊勢裕樹  
 ゆうじ 佐々木優太  
 たかし 袴田福明  
 としお 王 逸之  
 すすむ 比佐裕介  
 とおる 岡田慶太  
 あきら 又村崇仁

東京児童劇団

くじら 野中晋輔

スタッフ

製作 徳間康快

原作 「いよいよえん」(福音堂書店刊)  
 中川幸枝子さく 大村百合子え

監督・脚本 宮崎 豊

音楽 野見祐二

挿入歌「ぞうとらいふんまる」  
 作詞 中川幸枝子  
 作曲 野見祐二  
 編曲 野見祐二  
 歌 ほしくみのおとこのこたち

エンディング曲「おかえりのうた」  
 作詞 スタジオジブリ  
 作曲 野見祐二  
 編曲 野見祐二  
 歌 ちゅーりっぷほいくえんのこどもたち

演出アニメーター 福村 武志

原画 山口明子 田村 寛 中村勝利 松尾真理子  
 山田重一 小西賢一  
 橋本晋治 高田悦子  
 宮崎なごさ 山形厚史  
 湯浅政明

エンディング曲

# 「おかえりのうた」

作詞/スタジオジブリ

作・編曲/野見祐二

歌/ちゅーりっぷほいくえんのこどもたち

きょうも たのしく すみました  
 おかえり おしたく できました  
 なかよし こよしで かえりましょう  
 せんせい さよなら またあした



監査 チェック 鈴木まり子

監 演 斎藤昌也 アレキサンドラ・ワエラウフ 榎川周子  
野口美穂 室田真友子 佐志原瑞恵 星野 桂  
真野幹子 大村まゆみ  
東 誠子 西戸スミエ 土岐秀生 横田喜代子  
山浦由加里 谷平久美子 原佳寿美

作画協力 スタジオコクビット アニメトロトロ グループどんぐり

美術 平原さやか  
背景 武重洋二 佐々木洋明 矢野きくよ

色彩監修 保田道世  
撮影監修 奥井 敦

色指定 織田富美子  
検査 山田和子 野村豊輪  
スキャン 石井裕章 杉野 亮  
デジタルペイント 藤 奈緒美 井関真代 船田尚美 大山章博  
鶴岡由美子 岡田理恵  
CGチーフ 泉澤井隆一  
CG 佐藤美穂  
デジタル撮影 古城 環

編 集 瀬山武司

脚番演出 林 和弘  
監 音 井上秀司  
効 果 伊藤道廣

監音助手 橋田英二  
効果助手 中沢真理子  
効果制作 サウンドリング  
録音スタジオ 東京テレビセンター  
プレスコ録音 瀬川豊夫  
プレスコ録音助手 松本 博  
プレスコ演出 大園直子

音楽ミキサー 大野映彦  
指 揮 マリオ・クレメンス  
演 奏 チェコフィルハーモニー室内管弦楽団  
オーケストラ・コーディネイト オクタヴィア・レコード  
伊藤みゆき  
レコーディング・スタジオ 芸術家の家/ドヴォルザーク・ホール  
ワンダーステーション

音楽制作 スタジオジブリ  
稲城和重

制作マネージメント パワーボックス  
栗田秀一 柏村めぐみ

タイトル 山田百合子

演出助手 奥村正志

制作デスク 神村 篤 望月雄一郎

現像/製作協力 IMAGICA  
タイミング 平林弘明  
フィルムI/O 熊田祐男  
コーディネイト 川又武久


制 作 スタジオジブリ

プロデューサー 層村信治

製作プロデューサー補 高橋 望 遠辺宏行

製作プロデューサー 鈴木敏夫





発行日：2001年10月31日初刷 2009年5月30日第6刷  
発行人：中島清文  
発行所：財団法人徳間記念アニメーション文化財団  
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館  
編集協力：株式会社スタジオジブリ  
特別協力：株式会社福音館書店  
監査：今西千鶴子  
印刷・製本：国書印刷株式会社  
定価：400円(税込)

TMCFA-003 400



4 571101 904383